

地域診療待ち望む声

DMATが撤収して以降、避難所などに外向いて医療を担う医療救護班が全国から集まってきた。

「あとは滝田先生に診てもらいますから、先生はいいですよ」。大船渡病院を拠点にしていた医療救護班の一つで、自治医大病院（栃木県下野市）から派遣された医師、神田健史さん（38）は4月2日、末崎地区の避難所に入り、患者の声に驚いた。患者のほとんどが、この地区で開業していた唯一の医師、滝田有さん（51）の診療を求めていた。

滝田さんは3月11日、診療中に病院の2階で津波に襲われた。一緒にいた妻が水を大量に飲み、東北大病院（仙台市）に搬送された。4月3日、末崎地区へ戻ってきた滝田さん

に神田さんは避難所で向き合った。

診療所もカルテも無い、見るからに打ちのめされた様子だ。

「保険診療をやるべきです」。神田さんは切り出した。前日に診た患者たちを思い出した。まるで自分の親戚のことを話すような口ぶりで、滝田さんの診療再開を心待ちにしている。過疎地で医療に携わった経験がある神田さんでさえ、「コミュニケーションの一員としての医師とはこういう人のことなのか」と感じ、地域医療のお手本を見たような気がしていた。

滝田さんは悩んでいた。大船渡市ではすでに多数の医療救護班が活動し、被災者が無料で診療や投薬を受けられることができた。そんな中、自分だけお金を取って診療していいの

か。だが神田さんは、この地域の医療システムを再生させるために診療所の維持がどうしても必要だと考えていた。「先生を手伝えることは何でもやりますから」

4月4日、滝田さんの仮設診療所は、避難所があった「ふるさとセンター」の2階で始まった。自治医大の医療救護班は、末崎地区に10カ所ほどある避難所を巡回する班と、滝田さんのサポートをする班との二つに分かれて活動した。神田さんは滝田さんの後ろに控えて処方箋を手書きした。このおかげで滝田さんが患者と話す時間が削られずにすんだ。「支援に入ってくれた医師たちに心を打たれ」やらなきや」と思った。震災前と同じ土地で、同じ患者さんを診させてもらえるありがたさを感じた。大船渡病院を拠点にした自治医大の医療救護班の活動は、7月1日までに続いた。